

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の話し合いから生まれた理念で、認知症の為に見失われがちな、その人の尊敬、個性、可能性、本人の願いを見出して、その人らしい人生を「笑顔」=幸せに暮らせるように支えていくための道標としている。また、昨年は行動指針として「3つのします」「3つのしません」を職員皆で考えて加えた。その理念を事務所に掲示し、常に意識できるようにしている。	理念、行動指針については事務所に掲示し共有と実践に繋げている。スタッフ会議の資料には理念と、「3つのします」「3つのしません」の行動指針を必ず添え、利用者への影響も考えきめ細かく確認しあい利用者一人ひとりに合わせた支援に取り組んでいる。家族に対しては利用契約時に理念に沿った取り組みについて説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染症の流行により、地域との交流が以前のように行えなかったが、保育園の園児達と庭を挟んで交流会を行うことが出来た。利用者との交流を楽しみにされているボランティアの方が玄関先に手紙と野菜を差し入れて下さったりしている。コロナ禍ということもあり、中々ボランティアの方との交流の場を持っていない状況ではあるが、ガラス越しの面会やオンラインの面会の活用で感染対策をしながら工夫して交流の場を作っている。	開設から20年目を迎え、地域との交流活動を積極的に展開し各種行事への参加、また、当ホームへの行事にも各種ボランティアを初め地域の人々が多数来訪され、地域に開かれ親しまれる施設として活動を続けてきたが、昨年春以降の新型コロナの影響を受け、全ての交流活動が自粛状態に追い込まれ残念な状況となっている。新型コロナ収束後には新たに計画を立て積極的に交流活動を再開する予定である。そのような中、長野県社協の職場体験の受け入れや地域の高校で管理者が講師となり「認知症初任者研修」の授業を10時間受け持ち研修を行うなど、地域貢献活動にも取り組んでいる。また、以前入居されていた家族より10数年来野沢菜の差し入れを頂き、利用者と共に野沢菜を漬け、その味を楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域に向けた認知症の研修会や勉強会の依頼に対応したり、中学生・高校生実習生の受入を行っている。また介護相談も受けている。機会があればできるだけショートステイも受けるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	グループホームの実際の姿、現状の悩みなどを、できるだけ伝えるように心がけている。委員の方からの提案をいただくことも増え、講座開催やボランティア協力などにもつながってきている。今以上に事業所が地域の一員として受け入れてもらえる方法を運営推進会議などで検討している。コロナの影響で今年度実施に至らなかったが、運営推進委員の協力の下、喫茶開催を検討している。	利用者代表、家族代表、須坂市11ブロック区長代表、地域住民代表、民生児童委員、市高齢福祉課職員又は地域包括支援センター職員(年単位で交替)、ホーム関係者の出席で2ヶ月に1回開催している。利用者の状況報告、事故報告、活動予定、リスクマネージメント、意見交換などを行いサービスの向上に繋げている。職員に対してはスタッフ会議の席上、会議内容を報告し周知徹底を図っている。また、委員の皆さんには防災訓練への参加や施設行事にも参加いただき、一体感を持った運営推進会議を行っている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月のお便り「ふれあい通信」を見ていただいている。運営推進会議、その他の機会にも担当者と相談する機会が増えている。今年度はコロナ禍のため、行事参加いただいたり、生活の様子を見ていただくことはできなかった。ケースによっては入居者についての相談を、地域包括支援センターと行うこともある。	市高齢福祉課及び地域包括支援センターとは様々な事柄「利用者の内職の実施に当たった就業届の件、利用者親戚の苦情処理問題」等様々な事柄に付いて連携相談を行っている。管理者が認知症介護指導者でもあり地域包括支援センターと連携を取り「サポーター養成講座」の講師や県の「認知症介護実践者研修」の講師を務めている。介護認定更新調査は調査員がホームに来訪し行い数名の家族が立ち会われている。	

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所内研修として、身体の自由を奪うだけでなく、ホームの施錠や、本人の意思を無視した誘導も身体拘束となると理解して取り組んでいる。「禁止されている」ということだけでなく、相手の立場で考えることを大切にしている。行う場合は必要性をチームで十分検討の検討を行い、身体拘束委員会において毎月の状況を確認、報告して記録に残している。	拘束のないケアを方針とし、職員同士連携を取り拘束をなくして済む方法を考え取り組んでいる。夜間ベットの繰り返し降りられる利用者があり、夜間の職員が他の仕事をしている時間帯のみ柵を利用していたが現在は解除されている。玄関、ユニット間は日中開錠されており行き来に際してはチャイム音で知らせるようになってきている。外出傾向の強い利用者があるが、飼っている犬の散歩を一日数回行ったり、また、植木が好きの方については外の木の枝を取りに出掛けプランターに植えたりして対応している。身体拘束適正化委員会を毎月開き、意識を高め支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会に参加したり、勉強会のテーマとして取り上げている。『自分がされて嫌なことは虐待の可能性はある』という考えのもとに取り組んでいる。不適切な介護が虐待に繋がるものと意識することが大切と考えている。スピーチロック・ドロックについても拘束、虐待に繋がるものとして、理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度の利用者もあり、手続きの際の協力なども行った。入居者の状況に応じて、家族に説明を行っている。後見人を業務とする司法書士にも相談することができる。須坂市社会福祉協議会の職員に協力を得て、成年後見制度や日常生活支援についての説明と利用の検討を行ったケースもある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご家族代表の方以外にも出来るだけ同席いただきたい説明を行っている。契約内容の確認だけでなく、グループホームでの生活のリスクやターミナルについての考えも説明し、ご家族の意向や希望も聞いている。制度改正・報酬改正の時は、家族会の機会に直接説明を行い、重要事項説明書を改めて交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ホーム玄関や総合受付横にご意見箱を設置しているほか、契約時にその他の相談窓口の説明も行っている。運営推進会議には、ユニット毎の家族代表に出席してもらって意見を聴いたり、家族会の際にはアンケートも実施している。面会時の家族との意見交換も積極的に行い、ご家族からの要望については真摯に対応するよう心掛けている。	ほとんどの利用者は意思表示の出来る状況であり問い合わせを行い返事、表情等から要望を受け止めるよう心掛けている。家族の面会も自粛の状態が続いているが、事前予約制で15分位のオンライン面会を行い、半数位の家族が月1回位利用されている。また、玄関での越越し面会も事前に連絡していただき半数位の家族が利用されている。利用者のホームの様子は毎月発行されるお便り「ふれあい通信」で写真入りでお知らせしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のスタッフ会議とリーダー会議で、運営に関しての方針や、運営方法についての説明と提案を行うと共に職員の意見を聞いている。個々職員が積極的に意見を出し合えるカンファレンスや、「おやつとペーパー」を取り入れて気軽に意見を出せる環境を目指している。必要に応じては個別に意見交換を行っている。	月1回スタッフ会議を行っている、最近ではオンラインでの参加もあり全職員に内容の徹底を図っている。リスクマネジメント、身体拘束適正化委員会、各委員会からの連絡、行事予定、各種研修、意見交換等を行いサービスの向上に繋げている。人事考課制度があり年度初めに業務目標と自己啓発目標を立て、それを基に年3回、管理者、ホーム長による個人面談が行われ、意見・要望なども受け止めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入し、業務目標、自己啓発目標を策定し、向上心を持って働けるしほを築いている。入居者の状況に合わせた勤務シフトを取ったり、負担の少ない職員体制を検討している。今年度からキャリアパス制度が本格導入され、目標を明確にして取り組めるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で外部研修参加が難しい中でも、オンライン研修を自由に活用できるようになり、学べる機会を確保している。また必要な研修内容をDVD化して共有している。キャリアパスにおける「求められる能力」や「必要な研修」をもとに、自ら学ぶ機会を持つことを支援している。		

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は近隣地域(長野圏域)の小規模事業所のネットワークづくりに参加し、他事業所の研修会に参加したり、情報交換や学び場づくりを行っている。長野県宅老所・グループホーム連絡会にも当初より参加し、情報の収集を行ったり、管理者は研修講師を務めている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前情報に加え、出来るだけ本人からの情報を集めるよう「聴く」ことを大事にし、本人の考えや趣味趣向など、本人の言葉も大事にしている。本人の不安や混乱も考え、徐々に環境に慣れていくことが出来るよう、意識的に会話をする機会を多く持ちながら信頼関係を築くように心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族からも話をよく聞き、本人の思いと家族の思いを知った上での支援を考えている。それまでのご家族の思いや苦労の理解に務め、信頼関係の構築を目指している。話を聞く機会を多く持ち、本音をくみ取るようにしている。こちらからの相談など、細やかに連絡を取り合い、家族の意向を常に確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	満室時、相談や申込みを受けても、そのままにせず、状況に応じたサービス情報を提供したり、近隣のグループホームを紹介したりしている。入居までの相談にも応じている。またショートステイの希望も聞き、利用につなげるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に暮らす者として、都度声を掛け合い関わり、喜怒哀楽を共にする事で、お互いが安心できる関係でいられるよう心掛けている。本人の力を発揮できる場面を作っていくことを重要と考え、ホームの中で共に行うことを心がけている。理念に照らして、共に暮らし、笑顔のある生活を目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染予防で面会ができない為、オンライン面会、電話でお話をする、手紙のやりとりなどで、家族との繋がりを途切れないようにしている。家族には都度入居者の状況を伝え、情報を共有して、一緒に考えるように心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で以前ほど出かけることができなくなっているが、自宅や自宅周辺の散歩等、以前の関係を継続することに配慮している。日々の会話の中にも、馴染みの場所や人を話題として取り入れたりしている。また以前から行ってきた俳句などの趣味での関係(手紙など)を継続している方もあり、家族の協力を得て支援している。	通常であれば友人、知人の来訪があり親しく交流を楽しまれているが、現在は新型コロナの影響で中止の状態が続いている。収束後には再開する予定である。年末には職員の手助けを受け家族に年賀状を発送し喜ばれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を重視し、その関係に配慮した話しや活動(アクティビティ)ができるような時間を作っている。共に暮らす者として入居者同士がお互いを認め合え、支え合い、協力し合えるような関係づくりの支援に努めている。		

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	複合施設内で住居が替わった利用者には、会うたびに声をかけたり、ご家族からの相談にも応じている。亡くなられた方のご家族が、その後も関係を継続し、ホーム運営に協力していただいている方もいる。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話などから本人の思いを聞き、出来るだけ意に沿うよう努めている。意思疎通の難しくなった方も、それまでの関わりの中から、本人の意向を汲み取り支援を考えている。パーソンセンタードケアひもときシートなどを学び、それを取り入れたカンファレンスを行い、様々な視点から一人ひとりの「～したい」を支援したいと考えている。	職員の定着率も良く過去3年間離職者は1名もない状況で、利用者との関係性も良好な状態が続いている。そのような中、日々の支援で利用者の想いを受け止め希望に沿えるよう取り組んでいる。毎日の洋服選びや食事の好み等について提案し選んでいただくようにしている。居室や散歩の時間など、1対1で話をする時間を大切に捉え、希望を聞いたり本音を聞く機会としている。日々の気づいた言動等は毎日のケア記録と介護日誌に纏め、申し送りで確認したり、出勤時に担当する利用者の部分に必ず目を通し業務に入るようにしている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に面談を行ったり、実際に生活している場所を訪ねて、本人と家族や関係者から情報を収集し把握に努めている。情報は、ファイルにまとめて共有し、センター方式などを活用して、これまでの生活歴やその人らしさをつかむ努力をしている。ご家族にも協力いただき、なじみのある生活環境づくりを考えている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の生活リズムを把握し、利用者の様子や言動の記録をとることを重要と考えている。日々の記録から、その日の介護者が必要な情報を得られるように記録物を工夫している。利用者の状況を把握して、統一した目的で介護に当たれるよう情報を共有し活かしていきたいと考えている。変化がある方についてはユニット会議などで話し合い状況を共有している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人とご家族の意向も反映させ、評価4・アセスメントからケアプラン作成へと計画作成担当者や担当者が中心となり、チームスタッフの意見を聞きながら原案を作成するようにしている。可能な限り本人の「〇〇したい」を支援するよう努めている。	職員は1～2名の利用者を担当し、利用者の希望も加味した3ヶ月分のケアプランの1次評価の作成、居室管理などを担当している。カンファレンスの中でスタッフの意見も聞きながら家族の希望も取り入れ、計画作成担当者を中心にプランを作成している。入居時は1～3ヶ月で計画作成担当者がプラン作成を行い、その後は基本的には3ヶ月に1回の見直しを行い、変化がなければ6ヶ月での見直しとなり、状態に変化が見られた時には随時見直しを行い、利用者の希望に沿った支援に取り組んでいる。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア記録や健康管理表など利用者ごと個別に作成し、その情報が職員に共有できるようになっている。認知症介護の視点を大切に記録を心がけている。特に変化のあったことには、情報共有して統一したケアを行う。また、プランに沿って記載するよう心掛け、その記録を基に3か月毎に評価を行い、プラン見直しに活かしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の状況に合わせて、職員配置や勤務時間の変更を行い、ニーズに合わせて支援が行われる体制を考えている。入居者の1日の生活の流れを重視して、シフトに縛られず柔軟に職員が動くことを心がけている。グループホーム機能を活かして、緊急の受入れを行ったり、ショートステイも行っている。			

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の商店による出張販売での買い物も、定着し楽しみの一つになっている。季節にあわせた行事で外食を行ったりして楽しみを作り、参加を促している。防災訓練への参加、ボランティアによるも催しやお手伝い、地域の保育園、小学生との交流を行っている。現在はコロナ禍の為自粛しているが、自宅や自宅近隣の散歩を行っている方もいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在はかかりつけ医を持っている入居者も多い。その方々は家族が受診及び内服薬を定期的に処方して持参する。家族が受診の対応をする場合も、書面で生活の様子などの情報を提供している。クリニックニレイ利用者は定期受診を行っている。その他心療内科、総合病院等、適宜受診が必要となった場合の受診対応をしている。	入居時に利用医療機関についての希望を聞いている。現在、入居前からのかかりつけ医利用の方は数名で、家族対応での受診をお願いし、必要に応じ情報提供書を作成し持参して頂いている。他の大半の利用者は法人クリニックの月1回の受診で職員が付き添っている。また、心療内科を受診されている方が三分の一弱おり管理者がお連れしている。パート看護師2名を配置しており、日中は併設のクリニックと連携を取り健康管理に努めている。緊急時には隣接老人保健施設の看護師とも連携を図り、万全の医療体制を整えている。歯科については週1回の往診で対応し、同じ法人の歯科衛生士の来訪も定期的にあり口腔ケアのアドバイスを頂いている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護者は常に入居者と関わりを持っている為、異常の発見や気づきも多く、看護師への情報共有も進めているため、早期対応できる体制を整えている。グループホームの看護師は非常勤看護職員が2名おり、クリニックの看護師と協力して日常の健康管理に当たっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院し居た場合、その状態や様子、また退院に向けた情報など、医療機関の地域医療福祉連携室等と連携を取り合い、入居者が安心出来るように努めている。また病院担当者と、年に1度の意見交換も行われる。入院中は職員が面会に行き、洗濯の協力等必要な支援を行っている。可能な限り早めの退院をして、元の環境に戻れるように調整を図っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですべてを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご本人が何を望んでいるのか、家族がどこで最期を迎えさせてあげたいのかよく話し合い、グループホームで出来ること出来ないことを明確にして、家族、職員を含めた関係者が悔いを残さないことが、ご本人にとっても最良の最期だと考える。昨年は2名の看取りを4年ぶりに行った。職員それぞれが考えたことを大切に、グリーフケアやデスクカンファレンスも重要と考えている。	ターミナルケアについての指針があり、入居時に本人、家族の意向を聞きケアプランを作成し、看取り支援に対する説明を行っている。終末期に到った時には家族、医師、看護師、ホーム職員で話し合い、改めて看取り支援プランを作成し同意書にサインも頂き、看取り支援に取り組んでいる。昨年2名の方の看取りを行い、新型コロナ禍という状況下ではあったが居室において家族と共に最期の数日間を過ごすことが出来、家族からも感謝の言葉を頂いたという。年1回管理者が講師となり勉強会を行うと共に看取り後に振り返りの場を持ち次回に繋げるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会を行ったり、講習会への参加を呼びかけ、救急時のAEDの使用や心臓マッサージなどを学べる機会を設けている。誰でも行えるようにしている。緊急時の連絡体制、連絡方法等は、定期的に確認する機会を持っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、施設全体で夜間と昼間を想定した防災訓練を実施し、地域住民・消防団、運営推進委員等の方々も参加し、利用者も参加している。(今年度は事業所内で行った)ホーム独自にも研修や避難方法の検討を行い、非常時に即応できる体制を整えている。地震により連絡が取れなくなった時の取り決めも行っている。複合施設(法人)として、福祉避難所の協定も結び、一昨年の水害時は受け入れも行っている。	今年度は新型コロナの影響を受け、4月と10月に職員のみでの防災訓練を行った。スマートフォンを用い火災一斉メールを発信し届いたかどうかの確認もした。毎月のスタッフ会議の席上防災について確認を行い意識を高めている。備蓄については「お米」「レトルト食品」「缶詰」等、食料品1週間分とガスコンロ等が準備されており、防災マップの確認と合わせ備蓄の確認も行っている。市と福祉避難所の協定を結んでおり、一昨年の台風19号の際には別法人の利用者10数名が1ヶ月間、当複合施設に避難していたという。	

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人を大切にすること、プライバシーを守ることにについての意識向上を図っている。基本は人生の先輩を敬うことで、特に言葉遣いに気をつけたいと考えて研修機会も設けている。利用者本位を実現するために本人を主語にした介護を心掛け、日常的にチェックし、確認や改善を行っている。	毎月のスタッフ会議の中で勉強会を行い意識を高め、プライバシーの確保に繋げている。言葉遣いには特に気を配り、利用者を主語とした言葉遣いに心掛けている。また、入浴の際には利用者個々の希望に合わせて入浴時間を夜にしたり同性介助にも心掛けている。入室の際には「ノックと「失礼します」との声掛けを励行するようにしている。呼び掛けは入居時にご本人に聞き、希望する呼び方、呼ばれて自分だとわかる呼び方でお呼びしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の様子をよく観て、相手に合わせた理解しやすい言葉で、時に問いかけ、傾聴するということを大切にしている。相手の気持ちや意思の表出を、ゆっくり待ったり促したりして、本人の意思を表していただくよう関わっている。意思表示の難しい方も、必ず声をかけ、観察してすることで小さなサインにも気づけるように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先せず、本人の希望やペースに合わせた生活を支援することが重要と考えている。漫然と1日過ごすことのない様、昨日からの流れも考慮しながら、その日の勤務者が相談して、今日の取り組みを相談して行うことを目指している。日々その方に合った支援を考え、限定的にせず、臨機応変に行うことを良しと考えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段の服も自分の好みを尊重できるように支援している。外出の際はや行事の際は、意識しておしゃれを楽しむ声掛けなどを行っている。利用者同士が褒め合っている姿も見受けられる。本人の意思で理容・美容も選択いただき、希望に応じて髪染めの支援も行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好物を聞いたり、入居者と話して献立を決めたりしている。個々の状態に合わせて、食事に使う食材の下ごしらえから、味付け・味見・配膳・下膳・食器洗い等、出来る部分を職員と一緒にやっている。お祝いや行事などでは料理に工夫を凝らし楽しんでいただける食事を心がけている。個々の嗜好にあわせ、希望があればその都度応えている。	一部介助の方が三分の一強おり、他の利用者は自力で食事が摂れる状況である。新型コロナ禍という状況下、職員は共に食事を摂ることができないが、一緒に食卓に着き、話題を提供しながら楽しい時間を過ごしている。週2回生協のテラスを利用者と共に見て希望を聞き、食材を配達していただき利用者と共に調理をしている。何を食べたか記録に残し前週と出来るだけ重ならないよう意識し提供している。新型コロナの影響で外食の自粛状態が続いているが敬老会等のホーム内行事の際には「お寿司」や「豪華弁当」をテイクアウトして楽しんでいる。また、誕生日会にはケーキをデコレーションしたり、秋には野沢菜を皆で漬けて味わっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	状態に合わせて量や形態を配慮し、野菜を多く取り入れる等、栄養のバランスの良い食事を心がけている。声掛けにて水分摂取を促すと共に、個々の食事量や水分量のチェックも行っている。また体調に合わせて食事や栄養補給も行い、複合施設の管理栄養士の助言も受け、特別食の提供も可能となっている。6ヶ月ごとに栄養評価も実施し、必要に応じて管理栄養士によるカロリー計算等の支援を受けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ADLに合わせ、声掛けや介助でうがいや口腔ケアを行っている。その際、口腔内の状態把握にも努めている。夜間には、義歯を預かり洗浄している方もいる。歯科医の往診や受診支援も行っている。歯科医師の指示の元、歯科衛生士に利用者の口腔内の状態評価・指導を受ける体制を整え、月に1回の研修も行いケアに活かしている。		

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のパターンや、利用者がその時に発するサインを把握して、出来るだけトイレで座って排泄が可能となるよう支援している。排泄に関するニーズを特に重視し、最優先で支援し、定期的な声がけや誘導などの支援も行っている。課題がある場合は、集中的にアセスメントを行い、適切な支援に結び付けることを心がけている。	自立で布パンツ使用の方が数名で、他の方は一部介助でリハビリパンツとパット使用という状況である。職員は利用者一人ひとりのパターン(時間、行動、サイン等)を把握しており、それに合わせてトイレ誘導を行い、全利用者、トイレでの排泄に繋げている。また、一人ひとりの様子は健康管理表に排泄記録として日々残し、スムーズな排泄に繋げている。排便促進を図るべく、1日の水分摂取量を1,000cc以上に定め取り組んでいる。ホールの中にお茶を乗せた台車を置き、いつでも飲めるように環境を整えている。合わせてコーヒー、紅茶、ココア、甘酒等好きなものを飲んでいただくようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄の状態が認知症状の憎悪につながることを職員は理解しており、個々に排泄チェックを行っている。適度な運動、乳製品の摂取、食事内容を工夫している。薬による調整が必要な方は、日々状態をチェックして医師に相談しながら調整を行っている。水分摂取量のチェックも行い、便秘防止に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	出来るだけ本人の希望を考慮し、時間や回数を決めている。心身の清潔だけでなく、リラクゼーション、コミュニケーションを図れる機会と捉えている。身体的、精神的に困難がある方には、複数での介助、足浴、清拭も取り入れている。入浴回数も改善傾向にあり、介助担当者も工夫を凝らし気持ちの良い入浴を心がけている。希望により夕食後に入浴する方もいる。	見守りで自立の方は若干名で、他の方は何らかの介助が必要な状況となっている。基本的に週2回の入浴を行い、希望により3回入浴される方や夜入浴される方もおり、利用者の希望に合わせた対応も取り、全利用者が入浴できている。入浴剤を使ったり、季節により「ゆず湯」「菖蒲湯」等を行い、入浴後には好きな飲み物を飲んでいただき気持ち良く入浴していただくように心掛けている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の疲労感や体調を確認し、コミュニケーションを取りながら、休息や午睡を促している。それ以外の時は、出来るだけ離床し活動を促し、適度な疲労感を得ることで、安眠に繋がるように心がけている。その方のペースを大事にして、その方に合わせた生活が送れるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	健康管理表で内服薬等が一覧でき、薬の効果がわかるようになっており、処方の変更された場合は追記し皆が確認できるようになっている。服薬による症状の変化は、看護師を通じて主治医に相談している。服薬方法は、個々のADLや様子に合わせて支援を行い、必ず確認し記録している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中に役割を持っていただくことで、自信や活力に繋げる取り組みを行っている。生活歴の中から可能な事をさりげなく働きかけ、出来たことに対して一緒に喜んだり、感謝の言葉を伝えている。その方の体調や表情を見極めて、本人の自主性を引き出す働きかけを心がけている。庭仕事をしたり、内職を行う方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩を希望する方がいれば、他の方も誘って、職員が付き添い出かける。その日の取り組みを、朝の時点で打ち合わせ、なるべく個々に合った活動を支援する。少しでも陽にあたっていただく機会を作りたいと考えている。日常の会話で行きたい所を把握し、可能ならばに機会を作り出かけるようにしている。コロナ禍においては、感染防止に配慮し、ドライブで景色を楽しんだりしている。	外出時、自力歩行の方が三分の一、手引き歩行の方が若干名、車いす使用の方が半数強という状況である。天気の良い日には施設の周りを散歩したり、畑の草取りや収穫を行い、プランターに季節の花を植えたりして楽しみ、出来るだけ外の空気に触れるよう心掛けている。新型コロナ禍ということで外出が難しい状況が続いているが、感染対策を取った上で天気の良い日には少人数に分かれドライブを楽しんだり、車中より「桜」や「紅葉」等も楽しんでいる。新型コロナ収束後には年間行事計画に従い外出レクリエーションを再開する予定である。	

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金の所持したり使えるように支援している	月に一度、出張販売を行ってくれる商店の協力を得て、施設内でも買い物をする機会を作って支援している。少額お金を所持している方もいて、売店や外出の際はお支払いをして頂き、お金の理解や使い方を忘れる事の無いような支援をしているが、コロナ禍においては中止している。入居者からの預り金は、法人金庫・事務所内にて管理させていただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人と家族の意向を確認しながら支援を行っている。希望があれば家族へ電話をしている方もいる。携帯電話を所持している方もいる。コロナ禍においては、オンライン面会やガラス越しに面会いただいている。また、できる方はこちらから手紙を書く支援も行い、年賀状も自分の家族に宛てて書いたり、意向に沿って代筆させていただいている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食事作りを食堂で行うことによって、皆が参加できたり、匂いや音で興味をそそられたり、食欲が出るように考えている。音楽やTVなどは、利用者と相談して点けたり消したりしており、不快な音や刺激が無いよう心がけている。また、四季折々の飾り付けや、季節の花を飾り、季節感のあるスペース作りをしている。	適度な広さが確保されたホール兼食堂は一日の大半を過ごす寛ぎの場となっている。壁には「人形作家高橋まゆみ」のポスターや利用者制作の大きなハリ絵や絵画の作品、行事の際に写した家族との集合写真などが飾られ活動の様子を窺うことができる。また、陽当たりの良いホーム東側スペースには畑も準備され、元気な利用者の活動の場となっている。更に、両ユニットを挟むように地域交流センターの広いスペースが設けられており、各種行事、交流の場として活用されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに食事席以外のテーブルやソファを置いている。廊下やテラスにも椅子を置いている。思い思いの場所で、気の合った利用者同士で会話を楽しんだり、一人の時間を過ごしたりされている。地域交流センターでひなたぼっこをしたり、歌を唄ったりして過ごす方もいる。入居者の意向により、週に2回女性だけのお茶会を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際は、使い慣れた家具類や好みの品を用意していただくようお願いし、その後も様子を見ながらご家族と相談して環境を整えている。家族の写真や、花を飾り、自分の居場所だと実感し、くつろいでいただけるように工夫をしている。希望に合わせて、和室・洋室に模様替えすることもある。	整理整頓が行き届いた居室には洗面台と大きなクローゼットが設けられ暮らし易い造りとなっている。持ち込みは自由で、家族と相談し使い慣れた家具、ハンガーラック、テーブル、椅子、テレビ等でレイアウトされ、壁には自分の作品や家族の写真等が飾られ、思い思いの生活を送っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体がバリアフリーの作りになっていて、車椅子生活も可能となっている。廊下・食堂以外にも共用のトイレや浴室など随所に手すりを設置している。また状況に応じて付け替えを行い安全確保している。ドアには写真と名前のプレートを付けて、自分の部屋とわかるようにしている。居室内も、個々の身体状況にあわせたベッドや手すりを選んで設置している。		